

難波西鶴



【98】

森田 雅也

前回は「西宮えびす」の話をしましたが、西鶴のころ、西宮は港というより浜でした。「海之道」として何度も述べてきたように、

海路は高速道路。大坂までの大きなインターチェンジは姫路室津の後は明石でした。

西鶴は明石を題材とした話をとても多く書いています。『武道伝来記』『男色大鑑』等です。古代より明石は近畿の出入り口とし

て、陸海の要衝の地でした。梅原猛「水底の歌」の解釈によれば、柿本人麻呂が配流の際によったのも菅原道真が太宰府配流の際の陸路の果てが明石の泊だったのです。

現在も明石城と一対のようにならぬ島を見つめる高台にあるのが、「柿本神社」です。その横には、曹洞宗の名刹「月照寺」があります。明治まで神仏習合でしたから、多くの旅人の記録は、この寺社が混在しています。西鶴の俳諧の師匠で、

談林俳諧の祖・西山宗因は、この地を数度にわたり訪れています。それは弟子が明石にいたからで、西鶴にとっちは同門です。

そのことは『西鶴名残の友』(元禄8(1695)年刊)巻四の五「何ともしれぬ京の杉重」に明言します。

「春の海静かに、日影も入相の比より、明石の俳友にまねかれ、柿本才麿同道にて、昼の桜を夜咄しの……と大坂から明石へ乗り合い舟で向かいます。夜舟の徒然に桜の話題を気おけない弟子才麿としています。目の前には、これも奈良の弟子西流・西任から送られてきた「南都諸白」の

門人と風流なやりとり楽しむ

酒樽一つ。それには、西鶴先生が今年こそ奈良の八重桜を見に来られると心待ちしていたのに残念だと書き付けられていました。

西鶴が同乗の酒好きに振る舞おうと樽を開けると、おいしそうな餅が一杯。西鶴は下戸で酒が飲めなかったで、こんな洒落た悪戯をしたわけです。

しかし、上戸も洒落たことをするとあります。京から大坂へ舟で向かう酒好きにお土産であげた杉の重箱。枚方辺りであけると、雑炊セットでした。ともに風流な気配りですね。

(関西学院大文学部文学言語学科教授)

明石テーママの作品多い